

「人工透析中止で患者死亡」

2019年03月22日

東京都福生市の公立福生病院で、40代の腎臓病の女性が医師に人工透析を止める選択肢を示され、中止を選び、死亡した問題が報道され、大きな議論を呼んでいる。女性は他の病院で5年間、透析治療を受けていたが、透析に使う腕の血管の分路が詰まったため、福生病院に行った。担当外科医は首の血管に管を入れて透析を続ける治療と共に、透析そのものを止める選択肢を提示した。もちろん、止めれば死に直結することも説明した。女性は透析の中止を決め、同席した夫も同意書に署名した。容態は5日後に悪化し、亡くなった。亡くなるまでの間に苦しみ、透析再開とも受け取れる発言があったが、担当医は、透析を再開するか、苦しさを緩和するかを提示したところ、緩和措置を望んだという。

福生病院では、この女性を含め、透析中止を選んだ21名が死亡していたことが判明した。人工透析をしている知人がいた。透析は腎臓が機能しないため、血液を体外に出し、機械で血液の老廃物などを浄化し、体内に戻す治療で、週に3回、4時間ほどの治療を受けなければならない。大変な治療のように思えるが、当人から透析を受けていることを聞いて、初めて知るほど、平穏な日常生活をしていた。しかし、透析は苦しく、つらいだろうと思う。病人は苦しいと、死を望む気持ちになる。医師から、中止できると告げられると、楽になるのではないかと、心が死に誘われるのではないかと。

かつては、一分でも、一秒でも生かすことが医療の使命と考えていた。90歳を超えた男性が危篤状態になり、80歳を過ぎた奥さんを連れ、病院に急行したことがある。医師は心臓マッサージを懸命にして、回復させた。そのようなことが幾度かあり、本人の苦しみを思い、心臓マッサージを止めて、静かに逝かせてほしいと思ったこともある。また、脳幹が犯され、脳死と判定された50代前半の女性は、生前「綺麗なままで死にたい」と言っていたので、延命措置をつければ、何年も生きたかも知れないが、夫と二人の子どもは延命措置を外し、死を選んだ。外すと、あっという間に逝かれた。家族は大泣きして、妻、母を見送った。最近では、回復が不可能な場合、本人と家族の承認、そして、医者了解を得て、緩和治療だけで延命措置をしない「尊厳死」が認められ、この方法を希望する人々が増えている。当然であろう。更に、再起不能な人を薬物で死に至らせる「安楽死」を認める国々や米国の諸州がある。日本では、もちろん「安楽死」を認めていない。

福生病院の場合、死に至らせる薬物を投与したのではないから、「安楽死」させたのではない。治療を放棄したのだから「尊厳死」とも受け取れる。日本透析医学会が2014年にまとめた提言は、患者の全身状態が極めて良くない場合と、透析が命を損なう危険性が高い場合、透析の見合わせを検討するとしている。しかし、透析すれば日常生活が送れるのに、病院で医師から透析しますか、止めて死を選びますかと、自己決定を迫られたら、困惑するだろう。患者は病気については無知なことが多い。だから、医者の一言一言を聞き、医者を信頼したいと思っている。そして、誰でも生きたいという欲求があり、共に生きている者たちと深い関わりを持っている。自己決定を安易に迫るようなことは医者言うべきことではない。「少々辛い透析ですが、頑張りましょう」が医者言う言葉ではないか。福生病院のやり方は、背後に経済主義と結びついているのではないかという意見もある。経済主義とは、社会に貢献できる人こそが価値を持つ、裏返せば、生産性のない人は生きる資格がないという考えである。最近、至る所で、価値のない人は捨ててもよいとする人間不在の「優生思想」がはびこっているようで、怖さを覚える。